



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 東胡の後裔                                                                         |
| Author(s)    | 中村, 大介                                                                        |
| Citation     | 待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 23-32                                                   |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/105026">https://doi.org/10.18910/105026</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 東 胡 の 後 裔

中 村 大 介

## はじめに

大興安嶺北部から遼東・遼西地域の北縁は、鮮卑や烏桓が活動していた地域として知られ、『三国志』には彼らの祖先が東胡であり、匈奴の冒頓単于によって壊滅させられた結果、それぞれ拠点となる山の名をとって鮮卑や烏桓を名乗るようになったことが述べられている。初期の鮮卑に関しては、1960年頃からの呼倫貝爾高原での発掘によって古くから議論が盛んであったが、烏桓や東胡に関しては長らく考古学的には不明瞭であった。しかし、近年、1世紀頃には遼東半島まで烏桓と推定される墓地が広がることがわかってきただけでなく（中村 2020）、遼東地域の『西豊西岔溝』の正式報告書が刊行されたことによって（潘玲・他 2022）、前2世紀末～前1世紀の烏桓の様相も明らかになりつつある。本稿では、こうした東胡の後裔が東北アジアで果たした役割について、これまでの研究を整理しつつ、若干の考察を加えてみたい。まずは、研究が最も進展し、帰属を判断しやすい文物をもつ初期鮮卑から検討をはじめめる。なお、関連する遺跡は図1に示した。

## 1. 初期鮮卑に関する議論

『魏書』には、鮮卑拓跋部が四千里以上北にある地から現在の大同あたりまで移動してきたこと述べられている。考古学的には、1960年代に大興安嶺の西かつモンゴル高原の東端に位置する呼倫貝爾高原で、完工墓地（潘 1962; 内蒙古自治区文物工作隊 1965）、扎賚諾爾墓地（鄭 1961、内蒙古文物工作隊 1961、内蒙古文物考古研究所 1994）といった遺跡が発見された（図2）。扎賚諾爾墓地には、河套地区から岱海地区の鮮卑と共通する金製三鹿文牌飾といった文物がみられることから、宿白（1977）は、完工及び扎賚諾爾墓地を初期鮮卑と考え、文献にある拓跋部の南下が考古学的にも正しいと考えた。さらに、米文平（1981）が呼倫貝爾高原から大興安嶺を挟んで東に位置する嘎仙洞で『魏書』を裏付ける碑文を発見したことにより、呼倫貝爾高原を含む大興安嶺東西が拓跋部の故地であることがより支持されることになった。孫危・魏堅（2004）は増加した発掘事例をもとに、前1世紀末から5世紀までを5期区分し、2世紀初頭の2期に鮮卑拓跋部が河套地区から岱海地区あたりに南遷したと考えた。

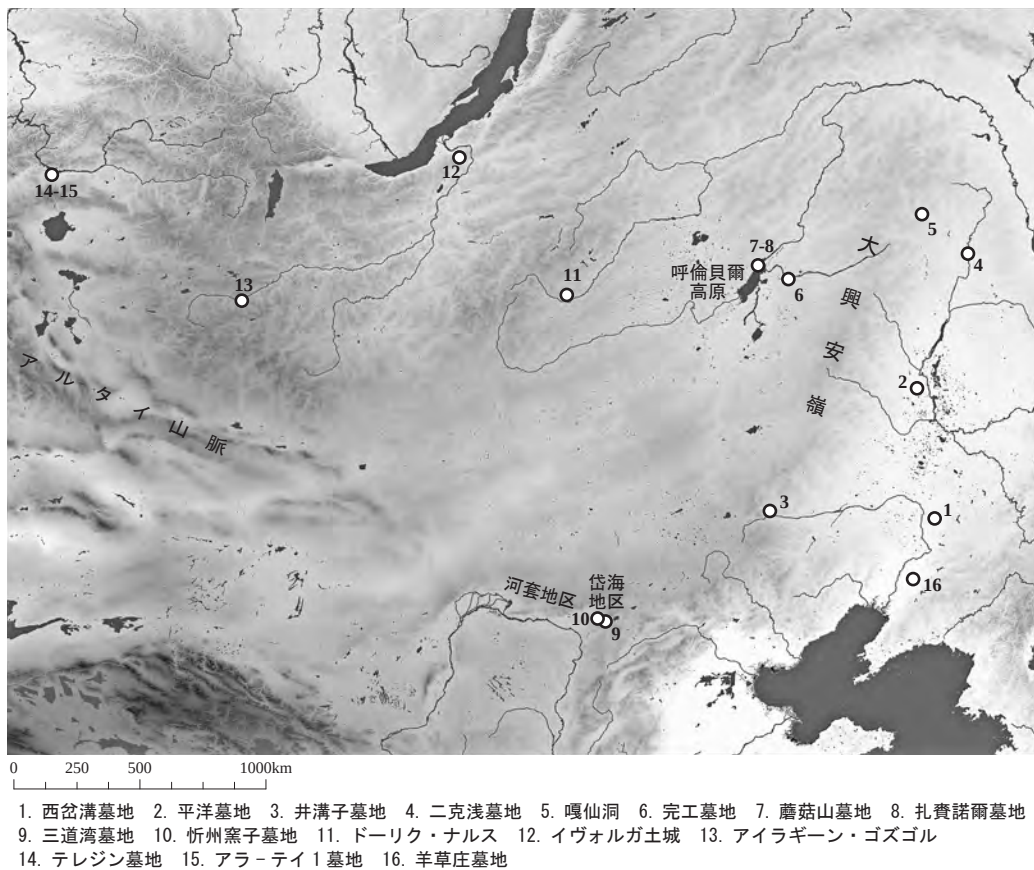
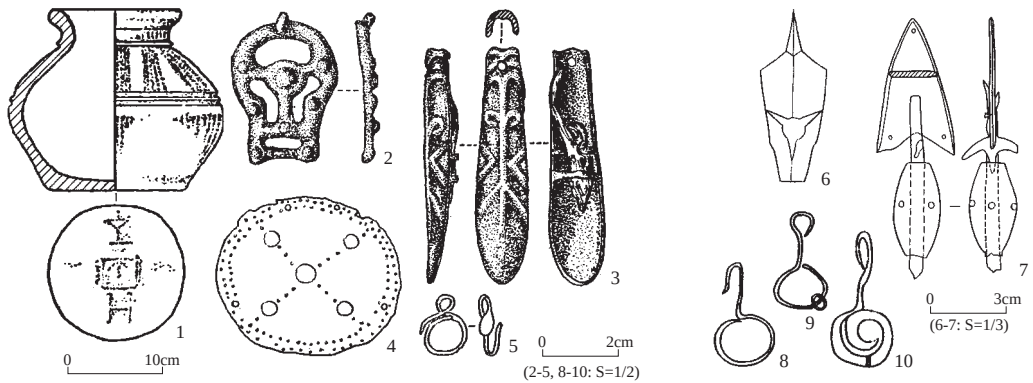


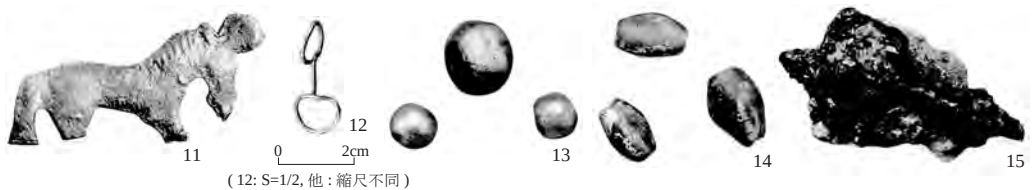
図1 東胡およびその後裔関連遺跡

一方、潘玲（2012）はこの理解を踏襲しつつ、前漢中・晩期に松嫩平原から遼西・遼東地域境界に人々が南下してきたという新しい見解を提示した。加えて、彼女はやや時間が下るとそこは烏桓の領域になっていることから、鮮卑と祖先を同じくする烏桓によって、長城地帯から遼東地域まで類似した文物をもつ墓地が広がったとしている。なお、完工墓地に関しては、扎賚諾爾墓地より古く前漢代であることが推定されていたが（臼杵 2001）、潘玲（2007）はブリヤートの匈奴遺物と比較して、これを匈奴としている。確かに匈奴土器に特徴的な、底部に回転台の軸痕がある土器が完工墓地から出土しており、匈奴の文物をもつ人々であったことは間違いない。孫危・魏堅（2004）は完工墓地の被葬者を、前漢末の匈奴ながら鮮卑拓跋部の影響を受けた人々としている。ただし、完工墓地の墓は合葬墓であり、一つの墓から男性 14 体、女性 11 体、小児 1 体の合葬と、多数のウシ、ウマの骨に混じって、イヌの骨が出土している。これは匈奴にない特徴であり、地域的にみても匈奴時代の鮮卑といったほうが妥当だろう。

以上のような研究によって、鮮卑に関わる文物が抽出され、被葬者が属する民族が判断できるようになってきた。附加堆文広口罐でしばしば低い脚部がつく土器、馬形牌飾もしくは鹿文



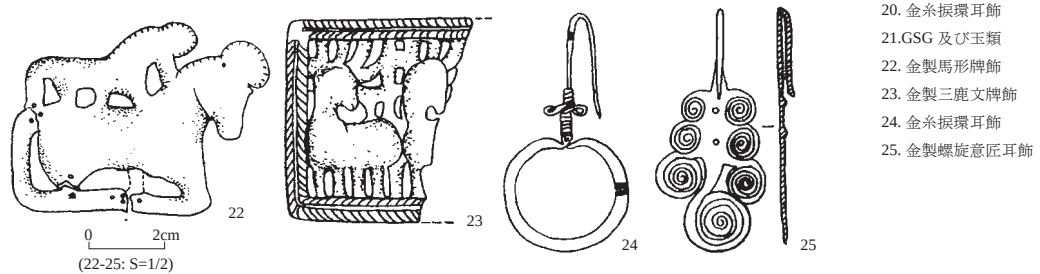
a. 完工墓地（前漢中・晩期、潘行榮 1962；內蒙古自治區文物工作隊 1965） b. 拉布達林墓地（後漢初期、王成・他 1994）



c. 蘑菇山墓地（後漢初 - 早期、中国社会科学院考古研究所・他編 2015）



d. 扎賚諾爾墓地（後漢早期、內蒙古文物考古研究所 1994；中国社会科学院考古研究所・他編 2015）



e. 三道灣墓地（後漢中・晩期、烏蘭察布博物館 1994）

図2 初期鮮卑の副葬品

飾牌、金糸振環耳飾もしくは螺旋意匠耳飾がその代表例である。今回は、鏡と貨幣の年代をもとに図2のように並べてみた。完工墓地や拉布達林の段階は耳飾も匈奴と大きな差はみられないが、扎賚諾爾墓地の段階から鮮卑の独自性といえる振環耳飾が出現している。大谷育恵(2011)は鮮卑慕容部の装身を検討するなかで、金糸振環耳飾は後漢以来の東北平原の装身具、三鹿文牌飾を含む長方形牌飾は内蒙古高原側の系譜をひく装身具であることを指摘しており、呼倫貝爾高原、遼東地域、遼西地域、河套地域の交流が盛んであったことがわかる。

しかし、こうした考古学上の共通点が指摘されるものの、先述した鮮卑拓跋部の起源に関しては、文献史学から反論が挙がっている。松下憲一(2020・2023)は5世紀の鮮卑拓跋部が柔然とライバル関係にあり、草原地帯の支配権を明示するため、嘎仙洞をその故地と定めたと指摘している。南遷したのちでも、呼倫貝爾高原東部の陳巴爾虎旗では東烏珠爾蘇木などで3世紀頃のガラス製玉類や金製品が採集されており(中国社会科学院考古研究所・他編2015)、この地の鮮卑が消えたわけではない。つまり、扎賚諾爾墓地をはじめとする呼倫貝爾高原の人々は、文物から鮮卑と推定できても、拓跋部かどうかは決定できないのである。そのため、本稿では、扎賚諾爾墓地などに関しては、単なる鮮卑としてあつかうことにしたい。

ところで、初期鮮卑もアルタイ山脈より西方につながる交流網をもっていた。それを端的に示すのが、ゴールド・サンドウィッチグラス(GSG)をはじめとした、ナトロンガラスや植物灰ガラスである。完工墓地や扎賚諾爾墓地でGSGはみられるが(馬建・他2024)、扎賚諾爾墓地のすぐ近くに位置する蘑菇山墓地では多数のGSGと包み巻技法で製作された褐色の長樽形ガラスが出土している(陳鳳山・他2014)。同様のセットはモンゴル高原西部の鮮卑墓であるアイラギーン・ゴズゴル1号墓からも出土しており、匈奴の影響が強く残っていることから1世紀初頭～前半のものと推定される。なお、馬健ら(2024)は、蘑菇山墓地を前漢早期とするが、地中海世界から中央アジアと呼倫貝爾高原の間に位置するモンゴル高原で前1世紀から後1世紀前半の事例しかない以上、そこまで遡らせることはできない。呼倫貝爾高原で最も年代が遡るのは現時点では完工墓地の事例であり、前1世紀頃である。

## 2. 前漢代の烏桓

### (1) 匈奴と烏桓

のちの北魏や三燕諸国を樹立した鮮卑に比べ、烏桓は王朝を築くには至らなかった。しかし、匈奴や漢に対峙し始めるのが鮮卑よりも早い。頭曼単于までの匈奴は、西の月氏と東の東胡に圧迫されていたものの、冒頓単于の台頭で東胡は壊滅した(『史記』匈奴列伝)。その後、鮮卑や烏桓に分かれたが、『史記』韓信盧綰列伝には、漢の高祖の親友である燕王盧綰が匈奴に亡命した際、東胡盧王となったとある。そして、前144年にその孫が漢に帰参したが、その元の

称号も東胡王であった。この東胡王が遺民である烏桓を束ねていたようである（吉本 2008）。

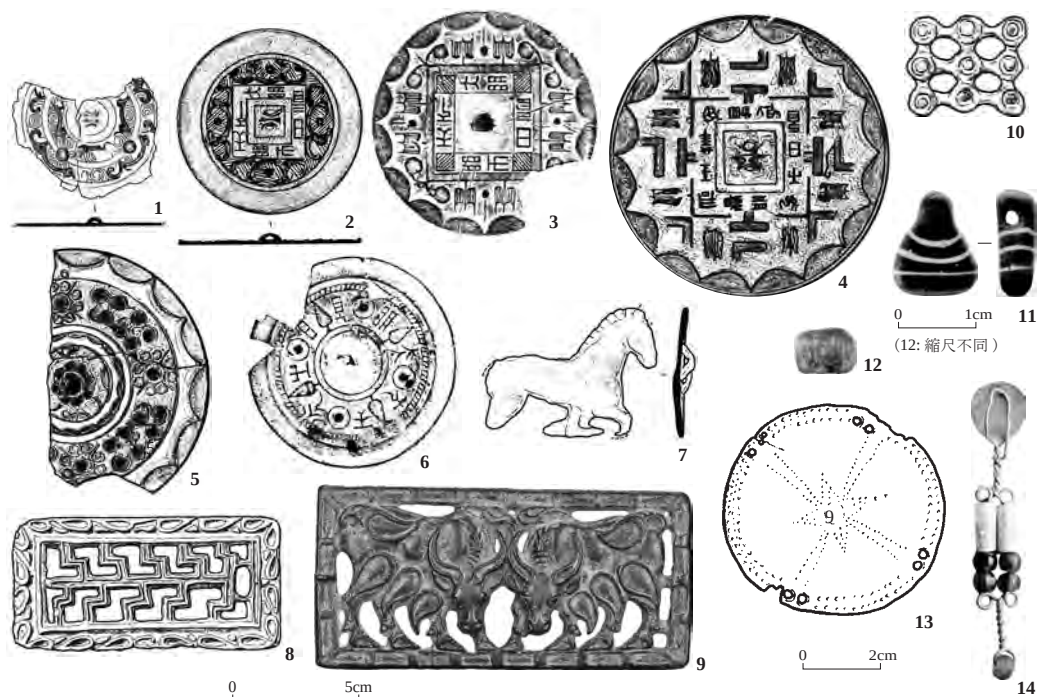
次いで『史記』衛將軍驃騎列伝には、前 119 年に霍去病が、趙信の助言を受けて漠北に引いた匈奴を破ったのち、転戦して、「出代、右北平千餘里、直左方兵、所斬捕功已多大將軍」とあるように匈奴左翼にも大打撃を与えたことが述べられている。『史記』匈奴列伝では、左賢王を敗走させたとある。『後漢書』烏桓鮮卑列伝ではさらに詳しく、「及武帝遣驃騎將軍霍去病擊破匈奴左地、因徙烏桓於上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東五郡塞外、為漢偵察匈奴動靜。其大人歲一朝見、於是始置護烏桓校尉、秩二千石、擁節監領之、使不得與匈奴交通」とあり、烏桓が燕北の塞外に配され、匈奴の動向を探る役目を得たという。漢は用心深く匈奴との通交を断つため、護烏桓校尉を設置している。注意したいのは、匈奴が漠北に移動してその体制を改めたあと、すぐにその左翼に大打撃を受けた点である。これによって匈奴の左翼経営が頓挫したかについては、近年の考古学的成果から検討してみたい。

## （2）西岔溝墓地の特質

上述した前漢燕国もしくはその塞外において重要な意味をもつのが西豊西岔溝墓地である。1950 年代に発掘されたのち、孫守道（1960）が簡易報告したのみであったが、触角式鉄劍、鈴柄鉄劍、帶飾板といったこの遺跡の重要性を物語る文物が報告されており、長らく研究者の関心を引いてきた。孫守道は、匈奴領域の左翼に位置し、遊牧生活に関わる意匠がある帶飾板をもつことなどから、西岔溝墓地の人々を匈奴としている。しかし、翌年には曾庸（1961）が立地と鉄劍の豊富さから烏桓説を唱えている。これに対し、公孫燕（1962）は、匈奴は東を濊貉に接することから（『史記』匈奴列伝）、孫守道と同じく匈奴もしくはその一派とした。このように簡易報告だけで盛んな議論が交わされたが、周辺地域で次々と関連遺跡が発掘され、民族的問題だけでなく、周辺地域との系譜関係や交流関係についても注目の的となっていた。

2022 年の正式報告（潘玲・他編 2022）で明らかとなった重要な点は、半兩錢と五銖錢がほぼ同量出土していることと、前 2 世紀後半の鏡、岡村秀典（1984・2008）の編年による漢鏡Ⅱ期が多数出土していることである（中村 2024）。西岔溝墓地出土鏡には、渦状虺文鏡、草葉文鏡、星雲文鏡、七縁銘帶鏡、虺龍文鏡であり、前 130 年から 20 年頃という年代幅がある（図 3）。しかし、主体は前 130-120 年かつ前 1 世紀前半までである。同時に、西岔溝墓地からはブリヤートの匈奴墓と共通する帶飾板も多数出土しており、匈奴と密接な関係があったことがわかる。また、ガラスも多数出土しており、シルバー・サンドウィッチグラス、連珠玉、ライン入り褐色三角形ガラス飾などは匈奴墓出土品と共通する。これらは、地中海東部、西アジア、中央アジアで製作されたものであり、地理的にみて匈奴を通じてしか獲得できない。

鮮卑と共通するものについては、馬形牌飾と銀糸・金糸振環耳飾があり、その年代は前漢晩期に遡る可能性がある。そのうち、玉類と組み合わせたものは、西岔溝 16 号墓の事例からみ



1. 渦状彫文鏡Ⅰ式 (K36-302) 2. 渦状彫文鏡Ⅱ式 (Z13) 3. 草葉文鏡ⅡE式 (Z182) 4. 方格規矩草葉文鏡ⅡE (Z182) 5. 星雲文鏡Ⅱ式 (Z164) 6. 七縁銘帯鏡 (Z182) 7. 馬形牌飾 (16号墓) 8. 階段文帯飾板 (Z164) 9. 双牛文帯飾板 (Z17) 10. 多体連珠飾 (Z114) 11. 褐色三角形ガラス飾 (30号墓) 12. シルバー・サンドウィッチグラス (12号墓) 13. 金製飾具 (K12-77) 14. 金糸振環耳飾 (16号墓)

a. 西岔溝墓地 (潘玲・他 2022)



15. 山字文鏡 (ATI 31号墓) 16. 渦文地文鏡 (ATI 2号墓) 17. 七縁方格銘帯鏡Ⅱ式 (ATI 25号墓) 18. 模倣星雲文鏡Ⅰ式 (ATI 11号墓) 19. 星雲文鏡Ⅰ式 (T表探) 20. 階段文帯飾板 (T 14号墓) 21. 双牛文帯飾板 (ATI 2号墓) 22. 多体連珠飾 (T 9号墓) 23. 褐色三角形ガラス飾 (ATI 12号墓)

b. テレジン墓地 (T) とアラータイ墓地 (ATI) (Leus 2011; Kilunovskaya & Leus 2021)

図3 西岔溝墓地とトゥヴァの墓地

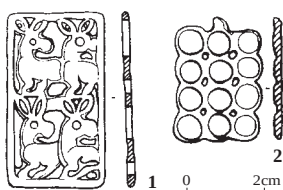
て後漢初頭である。松嫩平原の平洋墓地 107 号墓の事例（柳志軍他 2011）も同様の時期だろう。型式的な連続性と数量からみて、呼倫貝爾高原の扎賚諾爾墓地の金糸捩環耳飾は、松嫩平原から遼東地域の烏桓から影響を受けて受容したと考えるのが妥当である。

一方、匈奴の配下でありながら、異なる墓制をもつ墓地は反対方向のトゥヴァで発見されている。アラ－テイ I（Ala-Tey I）墓地とテレジン（Terezin）墓地は石棺墓で構成されており、やはり、ブリヤートの匈奴と共通する帯飾板を含む青銅飾具が多く出土した。ライン入りの褐色三角形ガラスも出土している。漢鏡には模倣鏡らしきものも含まれるが、アラ－テイ I 墓地には山字文鏡や渦文地鏡といった漢鏡 I 期（前 200—150 年）に遡る事例がみられる。また、ヒ縁方格銘帯鏡Ⅱ式、星雲文鏡Ⅰ式があり、前 120—100 年頃まで造墓が続いていた（図 3）。トゥヴァからブリヤートを経由して遼東地域まで類似したものがみられることから、モンゴル高原北側の草原路が前 2 世紀末に活発化したことがわかる。鏡の型式から考えて、単于庭の漠北回帰後にそのルートが強化されたといえよう。

ところで、匈奴は衛氏朝鮮と通じていたと推定されており（杉山 1997）、実際に衛氏朝鮮の貴族層が残存する段階の楽浪漢墓で、匈奴と漢の両系統の鉄製銜が副葬され（諫早 2012）、ゴールド・サンドウィッチグラスといった草原を経由する必要がある文物がみられる（中村 2024）。西岔溝墓地は丁度、匈奴と衛氏朝鮮の中間点にあり、その仲介者であったと推定される。強かに漢と匈奴の情勢をうかがっていたのである。西岔溝墓地の人々が塞外の烏桓であったかは定かでないが、匈奴の動向を探る役目を素直には果たしてしていない。加えて、匈奴にも西岔溝墓地にあるのと同種の漢鏡Ⅱ期の鏡が入ることから（Nakamura & Mukai 2024）、漢文物を交流に利用していた節もある。そして、ゴールド・サンドウィッチグラスの分布をみると（中村・田村 2023）、漠北の匈奴、呼倫貝爾高原の鮮卑、遼東地域の烏桓、朝鮮半島北部の政体という経路が前 1 世紀にも機能していたようである。1 世初頭より下ると西岔溝墓地の造墓はほぼなくなり、遼東郡治より南の遼東半島北部で墓地が増加するようになる（中村 2020）。『三国志』烏桓鮮卑東夷伝には、49 年に烏桓の郝旦が九千人の配下を引き連れ来朝し、東は遼東属国、西は朔方郡までの各地に住まわせることになったことが述べられており、西岔溝墓地の解体と遼東半島での墓地の出現はこうした内容と一致している。

### 3. 東胡の所在

東胡に関しては、前 5 世紀頃のシラムレン川流域の林西井溝子墓地が東胡とされ（王立新ほか編 2010）、さらに、遼東地域から遥かに北にある松嫩平原の平洋墓地が東胡から初期的な鮮卑であったとされている（楊志軍ほか編 2011）。平洋墓地ではイヌとウマの骨が最も多く副葬され、ヒツジが少なく、ブタがいる。これは長城地帯の同時期の騎馬遊牧民の墓では珍しい



1. 多鹿文牌飾 2. 多体連珠飾

図4 岱海地区における東胡の要素（曹建恩ほか編 2016）

動物供犠の組成である。『三国志』魏書烏丸鮮卑伝には、鮮卑が葬送においてイヌとウマを多用することが述べられており、平洋墓地はそれを彷彿とさせる。地理的、年代的に考えて、鮮卑の祖である東胡の一派の可能性であった可能性は高いだろう。

『史記』匈奴列伝では、前7世紀頃の内容として「燕北有東胡山戎、各分散居谿谷」と書かれており、前300年頃に燕の秦開が「…襲破走東胡、東胡却千餘里」としたのち、長城を築き、「上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡以拒胡」と五郡を置いて東胡を防いだとある（吉本 2008）。素直に読めば、夏家店上層文化があるところから東胡は遼西地域の北側の溪谷に散って居住し、戦国時代になっても健在であったとなる。長城地帯でも燕山より東方にスキト・シベリア地平の遊牧文化が入ってくるのは、早くて前600年以降であることから、最初の東胡はまだ騎馬遊牧民ではなかった可能性が高い。平洋墓地でブタが飼われていたのも、東胡領域では西方からきた騎馬遊牧民の影響を受けて、半農半牧民から遊牧民化していった集団が混じっていたことを示唆しているのではないだろうか。

一方、『史記』匈奴列伝には盧綰が離反の際に燕の上谷郡の東に入ったことから、燕国の北側に匈奴の領域が広がり、そこは匈奴に殲滅された東胡遺民の地であったことがわかる。吉本道雅（2008）は、『管子』小匡に出ている戦国時代には趙北にいた「屠何」が「東胡」であり、冒頓単于に敗れた際に燕北に移動したと推定している。しかし、前述した林西井溝子墓地は東胡に属すると推定されており、吉本の推定より早くに燕北に出現している。

岱海地区の忻州窯子墓地では戦国早期の墓から多体連珠飾、鹿文牌飾が出土している（図4）。これは同じ地区の毛慶溝墓地からは出土していない。この時期の長城地帯の遊牧民の墓地は同じ地域であっても少しずつ内容が異なるが、忻州窯子墓地では鮮卑や烏桓につながる文物が保有されていたのである。もちろん、彼らが趙北にいた屠何とは単純に言えない。元々、岱海地区は「楼煩」の領域ともされているものの（宮本 2000、烏恩岳斯図 2007）、前述したように墓地の様相は一様ではない。統率する有力民族集団が楼煩で、その下位集団に屠何あるいは東胡の一群がいても不思議ではないのである。むしろ、井溝墓地や平洋墓地といった考古学的事例からみると、燕北を中心に岱海地区まで緩やかに広がっていたのが東胡の実態なのだろう。ただし、漠北の草原地帯にどれほど広がっていたのかは現在の資料からは不明である。

## おわりに

本稿では大興安嶺北部から遼西地域北縁のいわゆる燕北の騎馬遊牧民について論じてきた。

この地域は、モンゴル高原西部ほど西方の交易品が多くないため、文化的には目立たない部分もあるが、草原と森林が混じり、さらに農耕地帯と接するため、豊かな生産力をもつ地域である。燕北の騎馬遊牧文化は、移民と在地民の遊牧民化によって形成され、それが東胡として、戦国時代晩期には豊かな環境を背景に強勢を誇ったのだろう。彼らは匈奴によって壊滅することになったが、鮮卑と烏桓としてまとまりを保っていた。そして、前1世紀前半の匈奴の壺衍鞬单于の頃には、烏桓が歴代单于の墓を暴くなど、再び強勢になっている。烏桓の場合は単発的な優位を繰り返したが、鮮卑は2世紀後半には檀石槐を出し、旧匈奴領域を支配するまでに成長した。前漢代は匈奴の配下として西方の文物を東北アジアにもたらし、後漢代には自らが経路となっている。東北アジアに新しい風を吹きこんだ騎馬遊牧民として評価することも可能であろう。また、1世紀から2世紀前半には、すでに鮮卑が漠北に広がっていたことが、近年のモンゴルの調査でわかってきた。どのように民族集団を把握していくのかの問題が残っているが、これについては別の機会に検討してみたい。

## 謝 辞

本稿は JSPS22H00012、23H03918（代表：中村大介）の成果である。モンゴルでのガラスの調査に関して、ロチン・イシツェレン氏（モンゴル科学アカデミー）、田村朋美（奈良文化財研究所）に感謝申し上げる。福永伸哉先生には学生時代から今日に至るまで考古学とは何か、研究とは何かを教えてくださいました。今後ともご指導のほどよろしくお願いします。

## 引用・参考文献

### 【日文】

- 大谷育恵 2011「三燕金属製装身具の研究」『金沢大学考古学紀要』32 金沢大学考古学研究室、石川：pp. 87-105
- 中村大介 2020「漢代における遼東郡と交易」『埼玉大学紀要（教養学部）』55（2） 埼玉大学教育学部、埼玉：pp. 129-147
- 中村大介 2024『青銅器が変えた弥生社会』吉川弘文館、東京
- 中村大介・田村朋美 2023「アジアにおける漢代併行期のガラス流通」『古代学研究所紀要』32 明治大学古代学研究所、東京：pp. 18-28
- 松下憲一 2020「拓跋鮮卑の南下伝説：北魏の歴史認識」『愛知学院大学文学部紀要』50 愛知学院大学文学部、愛知：pp. 225-242
- 松下憲一 2023『中華を生んだ遊牧民：鮮卑拓跋の歴史』講談社、東京
- 宮本一夫 2000『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店、福岡
- 吉本道雅 2008「東胡考」『史林』91（2） 史学研究会、京都：pp. 95-115

## 【中文】

- 曾庸 1961「遼寧西豐西岔溝古墓群為烏桓文化遺跡論」『考古』1961（6） 科学出版社、北京：pp. 334-33
- 曹建恩・孫金松・党郁編 2016『岱海地区東周墓群發掘報告』科学出版社、北京
- 公孫燕 1962「論濊貉之“貉”非東胡人：兼考漢初濊貉地望」『考古』1962（10） 科学出版社、北京：pp. 548-552
- 潘玲 2007「完工墓地的文化性質和年代」『考古』2007（9） 科学出版社、北京：pp. 78-86
- 潘玲 2012「長城地帶早期鮮卑遺存文化因素来源分析」『边疆考古研究』11 科学出版社、北京：pp. 183-198
- 潘玲・田立坤・劉寧・李新全 2022『西豐西岔溝』科学出版社、北京
- 潘行榮 1962「內蒙古陳巴爾虎旗完工索木發現古墓葬」『考古』1962（11） 科学出版社、北京：pp. 590-591
- 米文平 1981「鮮卑石室的發現与初步研究」『文物』1981（2） 文物出版社、北京：pp. 1-7
- 內蒙古自治区文物工作隊 1965「內蒙古陳巴爾虎旗完工古墓清理簡報」『考古』1965（11） 科学出版社、北京：pp. 273-282
- 內蒙古文物考古研究所 1994「扎賚諾爾古墓群 1986 年清理發掘報」『內蒙古文物考古論集』中国百科全書出版社、北京：pp. 369-383
- 宿白 1977「東北、內蒙古地区的鮮卑遺跡：鮮卑遺跡輯錄之一」『文物』1977（5） 文物出版社、北京：42-54
- 唐森編 2018『大安漢書：青銅器時代遺址考古發掘報告』科学出版社、北京
- 王成・塔拉・張春 1994「額爾古納右旗拉布達林鮮卑墓群發掘簡單報」『內蒙古文物考古論集』中国百科全書出版社、北京
- 烏恩岳斯因 2007『北方草原考古学文化研究』文物出版社、北京
- 烏蘭察布博物館 1994「察右后旗三道灣墓地」『內蒙古文物考古文集』中国大百科全書出版社、北京：pp. 407-437
- 楊志軍・郝思德・李陳奇 2011『平洋墓葬』文物出版社、北京
- 鄭隆 1961「內蒙古扎賚諾爾古墓群調查記」『文物』1961（9） 文物出版社、北京：16-19
- 中国社会科学院考古研究所ほか編 2015『呼倫貝爾民族文物考古大系：陳巴爾虎旗卷』文物出版社、北京

## 【英文】

- Nakamura D. & Mukai Y. 2024. *Dating and interaction of the Xiongnu according to the Han Mirror*. Xiongnu Archaeology: Chronology Issue, in printing. Institute of Archaeology, Mongolian Academy of Sciences.